

教職大学院 Newsletter No. 112

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2018.6.22

実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2018 Summer Sessions 特集号

**実践し
省察する
コミュニティ**

*Round Tables:
Summer Sessions 2018
for Reflective Practice
and Organizational Learning
@ University of Fukui*

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル
2018 summer sessions
6/22(fri) 17:30-18:40
23(sat) 13:00-17:40
24(sun) 8:20-14:00
福井大学総合研究棟V (教育系1号館) 総合研究棟
AOSSA

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2018.6.22-24

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院
大学院連合教職開発研究科
共催 社会教育実践研究フォーラム
後援 福井県教育委員会・福井県立コンベンションビューロー

内容

- ラウンドテーブルによるこそ (2)
- 実践し省察するコミュニティ
- 実践研究福井 ラウンドテーブル
- 全体スケジュール (3)
- Pre-session (4)
- ZoneA 学校 (4)
- ZoneB 教師 (5)
- ZoneC コミュニティ (8)
- ZoneD 授業 (9)
- 省察的实践学会 発足に向けた第4回準備会 (11)
- Round Table Cross Sessions (11)
- Students' Poster Session (12)
- 実践し省察するコミュニティを結び支える (13)
- ラウンドテーブルの歩み (15)
- ラウンドテーブルの広がり と 深化 (17)
- アーカイブ (18)
- 基金のお知らせ (24)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2018年6月の開催をもって35回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。初日のプレセッション、学校 (Zone A)・教師 (Zone B)・コミュニティ (Zone C)・授業 (Zone D) の各領域に分かれた2日目の各ゾーンのセッションを経て、最終日はクロスセッションでの語り合い・聴き合いを行います。この3日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

ラウンドテーブルによるこそ

福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科長

松 木 健 一

梅雨があけずうっとおいしい毎日がつづきますが、実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions に参加いただき、ありがとうございます。連合教職開発研究科では、福井大学で年2回のラウンドテーブルの開催と、各地域でのラウンドテーブルの開催支援を行ってきています。福井開催の spring sessions では、実践の長い歩みのプロセスを1年間通してじっくり語り、聴き合い、そして互いに問いあい、深めあうことに主眼があります。また、summer sessions では、年間活動の途中ということもあり、実践の語りと傾聴に加え、長い実践の歩みを相互省察する中で、明日からの実践を拓くことを大切にしています。

ところで、新学習指導要領が先行実施されていますが、今回の改訂とラウンドテーブルに関わって気づくことが2つあります。長い実践を振り返ることと、実践を語り傾聴することに関わってです。

まず、長い実践についてですが、これが資質・能力の育成に大きくかかわっているということについてです。新学習指導要領は、コンテンツベースからコンピテンシーベースへの転換だと言われますが、コンテンツ抜きにコンピテンシーが育つわけがありませんから、実際は、コンテンツ+コンピテンシーへの転換であるということでしょう。ところが、+αのコンピテンシーつまり資質・能力は、直接的に教示することはできないところに特徴があります。頑張る力を育てる単元、判断力を身につける練習などというのは、どこか怪しげな感じがします。ということは、今回の指導要領の改訂は、実は大変なことが提案されているわけです。知識・技能を教えていた教師が、直接的に教示できない資質・能力を培わなければならないわけですから。これはパニックです。ところがさほど大騒ぎにならないのは、なぜなのでしょう。

パニックにならないことが気がかりですが、話を戻します。資質・能力は、子どもが関心を持ち、解決のための手立てを講じて実施し、また考え直して、再度挑戦する。そんな学習のサイクルの中で培われるのです。このプロセスを短絡化し、知識を覚えるだけの学習では、資質・能力は育ちません。また、前述の発意・構想・構築・遂行・省察といった学習のサイクルは、知識・技能の習得領域だけでなく、そのことに自己がどうかかわるか(自己の態度や価値観の育成に関わる領域)、他者にどう働きかけるのか(社会参画し協働する領域)といった2領域をも絡めて、はじめて成り立つ学習活動でもあるわけです。このような学習のサイクルの中で培われた資質・能力を見取るためには、長い実践の振り返りが必要となります。学習活動と学習活動の繋がりの中に、子どもの資質・能力の育ちが具現化するからです。そして、長い実践を読み解いたりまとめたりする教師の資質・能力がなければ、子どもに育った資質・能力を見取ることはできないと言っても過言ではありません。新学習指導要領を実施していくためには、ラウンドテーブルのような機会が必要なのです。

2つ目は実践の語りと傾聴に関してです。新学習指導要領のもう1つの特徴は、教科内容の習得それ自体が教育の最終目標でないことを明言し、幼児期から高校教育まで3つの資質・能力の育成を教育の目標に掲げたことです。つまり、3つの資質・能力の育成という観点から見ると、保育所の実践も高校の実践も同じ資質・能力の育成を目指していることになります。また、教科の違いは、物の見方考え方の違いであって、教育の目標は、同じ3つの資質・能力の育成ということになります。ここに至って晴れて教科や校種の違いを超えて、学習する子どもの視点に立って、実践を語り傾聴し合うことの意味の重要性が位置付いたように思います。例えば、協働する力の育成について。子どもの年齢や学習内容の違いを超えて論議することで、協働性という資質・能力の発達のプロセスを明らかにすることができるのです。子どもの資質・能力を培い、教師が専門職としての資質・能力を鍛えるのには、長い実践の語りと傾聴の中で子どもの育ちを確認し合うラウンドテーブルのような機会が必要なのです。

ラウンドテーブルでの出会いが、専門職としての資質・能力の向上に資することを願ってやみません。明日はきっと晴れるに違いありません。

実践研究

福井ラウンドテーブル

summer sessions 2018

6/22(fri)

Pre-session 17:30-18:40

専門職学習コミュニティを培う
ラウンドテーブルの意味

6/23(sat) 13:00-17:40

Students' Poster Session 13:10-14:10 子どもたちが語る「私たちの学校・学び・未来」

Students' Forum 14:20-16:00 僕たちがつくる学びのカタチ ～なぜ学ぶ? どう学ぶ?～

orientation 13:00-13:10

学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

A 学校:子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

ー次代の社会を担う人材育成を目指した新たな学校づくりー

B 教師 ①有識者会議の報告を受け教師教育はどこに向かうのか:教科の専門性と教員研修の明日を問う

②これからの教員養成を学部・大学院を通して考えるー実践を聴き、夢を語るー

C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする

ーつながりの編み直しを支えるー

D 授業研究:子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

ー子どもたちの探究的な学びを支える教師の協働探究ー with international sessions

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る symposiums

session III 16:00-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める forums

18:00-18:40 省察的実践学会準備会

6/24(sun) 8:20-14:00

Session IV Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

●6/24の session IV の参加についてのお願い＝午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

6/22 (fri) 17:30-18:40 会場：教育系1号館 6階コラボレーションホール

Pre-session 専門職学習コミュニティを培う

ラウンドテーブルの意味

6/23 (sat) 13:00-17:40

学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

Zone A 学校

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

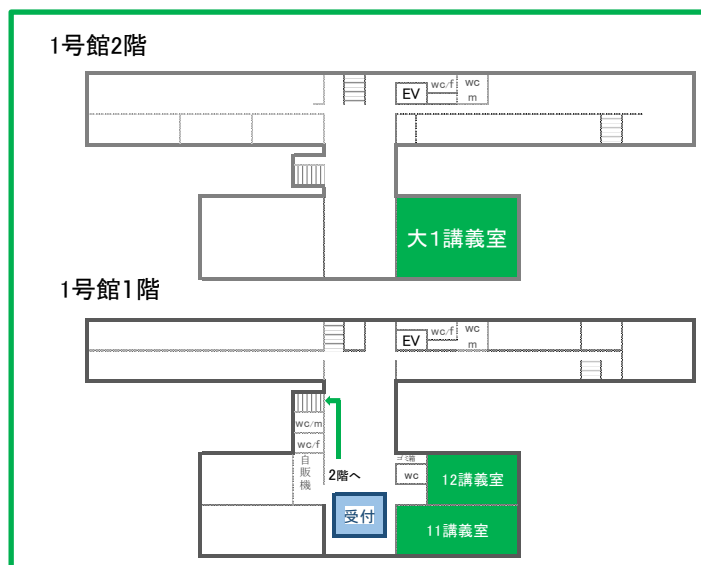
次代の社会を担う人材育成を目指した新たな学校づくり

会場：教育系1号館2階 大1講義室 / 1階 11, 12講義室

これまでZone Aでは、「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマのもと、学校における協働の在り方について議論を積み重ね、その重要性を様々な角度から確認してきました。現在、教育現場において教師集団がコミュニティとなって協働することの重要性は、「チーム学校」といった言葉に端的に見られるように、もはや周知のものとなっています。そして、協働的な実践を積み重ねてきた方々であれば、チームで取り組むことの確かな有効性や実り豊かな可能性を実感しているのではないのでしょうか。しかし、たとえチームを組織したとしても、その活動が「これまでの学校」の枠組みを脱しないとするならば、次代の社会を生き、その社会を中心となって担っていくであろう子どもたちに資するものにはならないかもしれません。一方で、しばしば理念ばかりが先行し、意義は分かるが多忙な現実の中で具体的にはどうすれば良いのかと不安を抱いている方々が多いのも現実だと思います。

こうした問題意識のもと、私たちは今回、「新たな学校づくり」というキーワードに着目することにしました。これからの社会を生きる子どもたちを支えるという視点から考えるならば、そこには、私たち教師の、あるいは学校の、さらには地域や社会全体の、そしてチームそのものとしての、学校という仕組みや組織の問い直しもまた同時に浮かび上がってくるからです。

そこで今回Zone Aでは、「次代の社会を担う人材育成を目指した新たな学校づくり」というサブタイトルを掲げることにしました。ポスターセッション



では、このテーマに基づいた様々な取り組みを、ポスターを通して発表いただきます。続くシンポジウムでは、今、まさに、それぞれの地域や社会の要請を受け、新しい学校づくりに取り組んでおられる先生方をお呼びし、その実践についてお聞きします。さらに、最後のフォーラムでは、参加者の皆さんはどのように考えるのか、それぞれのお立場から語り合う時間を持ちたいと考えております。この3つのセッションを通し、これからの学校教育における教師コミュニティの可能性について、皆さんと深め合うことができればと考えております。

Orientation	13:00-13:10	ガイダンス	＜教育系 1 号館 2 階	大 1 講義室＞
Session I	13:10-14:10	ポスターセッション(ナレッジフェア)	＜教育系 1 号館	1・2 階 フロア＞
Session II	14:20-15:50	シンポジウム	＜教育系 1 号館 2 階	大 1 講義室＞
子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ				
: 次代の社会を担う人材育成を目指した新たな学校づくり				
＜シンポジスト＞		福井県立坂井高等学校校長	吉田 繁 氏	
		長野県信濃町立信濃小中学校教諭	結解 武宏 氏	
＜コーディネーター＞		福井大学連合教職大学院准教授	中島 健 氏	
Session III	16:00-17:40	フォーラム	＜1 号館 1 階	11, 12 講義室＞

Zone B 教師

21世紀の教師教育をイノベーションする

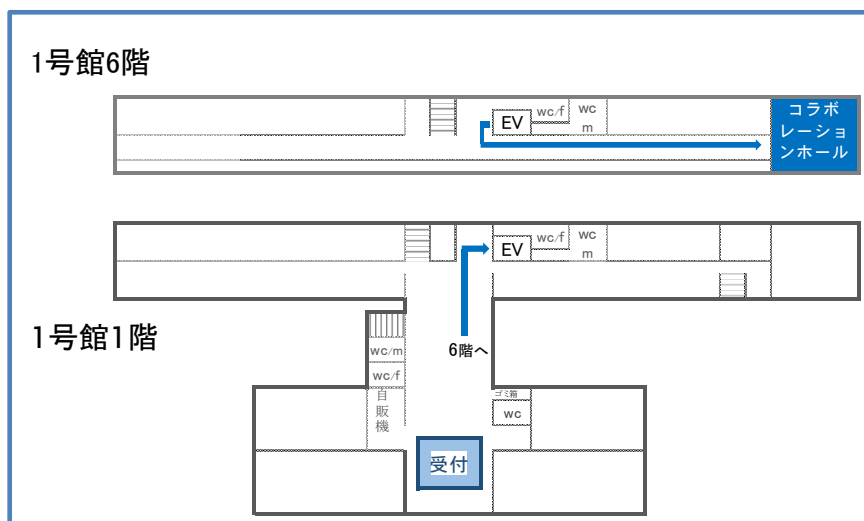
B1 有識者会議の報告を受け教師教育はどこに向かうのか

: 教科の専門性と教員研修の明日を問う

会場： 教育系 1 号館 6 階 コラボレーションホール

平成 27 年の中教審答申は、教員の資質・能力の向上を目指す制度改革について、教育委員会、学校、大学等が目標を共有して互いに連携しながら、次期学習指導要領等に向けて教員に求められる力を効果的に育成できるよう、教育委員会と大学等との協議の場の設置や教員に求められる能力を明確化する教員育成指標、それらを踏まえた研修計画の策定などを実施することとし、教員研修自体の在り方を、「アクティブ・ラーニング」の視点で見直すことなども提言しています。福井県と本学教職大学院は、この提言以前から教職員の基本研修や新任教頭研修などに協働で取り組んできましたが、昨年度より、これまでの教員研修を根本から見直し、福井県教育委員会が行ってきた基本研修と教職大学院が行ってきた教員免許状更新講習を一体化させるなど、新たな体系の構築に向けた取組を始めています。

こうした大学と自治体の連携の動きは、福井県だけでなく国内各地でも始まっていますが、昨年度のシンポジウムでは、連携を始めた国内各地の教職大学院と自治体



の関係者から新しい教員研修体系構築の現状を報告していただき、その構築の在り方を検討し合いながら、今後の展望を探ってみました。

今年度は、現在、福井県教育委員会と福井大学連合教職大学院が協働しながら、実際にどのような教員研修を行い、今後どんな研修体系を構築しようとしているのか、それぞれの立場から、管理職研修や教員免許状更新講習、教員育成指標の導入も含めた生涯にわたる教員研修のカリキュラムなどについて報告します。それに対して、元長野県教育委員会教育長で文部科学省高等教育局大学改革推進室長や初等中等教育局財務課長を歴任された伊藤学司氏、文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長の高田行紀氏のお二人のコメンテーターに鋭い視点で切り込んでいただき、参加者の皆さんと、これからの教員研修のあり方を展望していきたいと考えています。

Orientation	13:00-13:10	ガイダンス	＜教育系 1 号館 6 階	コラボレーションホール＞
Session I	13:10-14:10	ポスターセッション(ナレッジフェア)	＜教育系 1 号館	1・2 階フロア＞
Session II	14:20-17:40	シンポジウム	＜教育系 1 号館 6 階	コラボレーションホール＞

〈シンポジスト〉	福井県教育総合研究所所長	牧野 行治 氏
	福井県教育庁教育政策課課長	片柳 成彬 氏
	福井大学連合教職大学院教授	淵本 幸嗣 氏
	福井大学連合教職大学院准教授	小杉 真一郎 氏
〈コーディネーター〉	公益財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会	
	チーフ・フィナンシャル・オフィサー（兼）企画財務局長 伊藤 学司 氏	
	文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長 高田 行紀 氏	
〈コーディネーター〉	福井大学連合教職大学院教授	三田村 彰 氏

B2 これからの教員養成を学部・大学院を通して考える

：実践を聴き、夢を語る

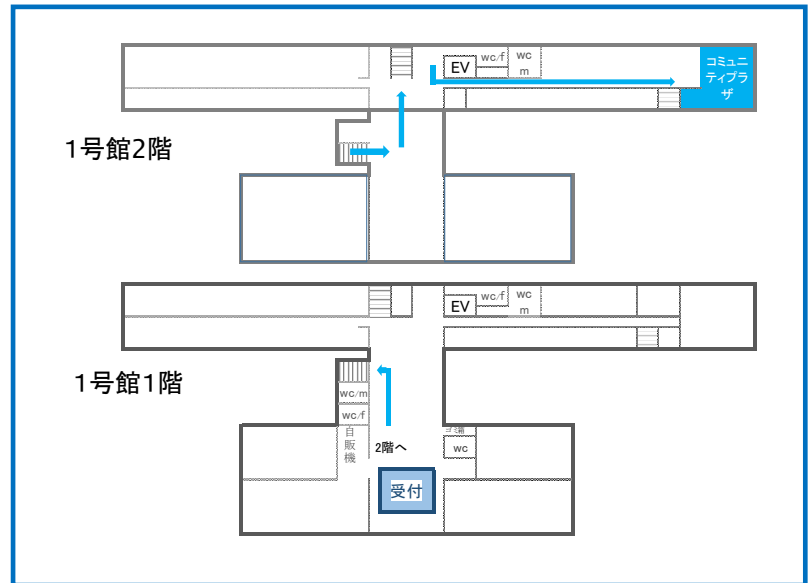
会場：教育系 1 号館 2 階 コミュニティプラザ

教員養成をめぐる制度の見直しへの提起が重ねられ、とりわけ教職免許法の改正にともなうカリキュラムの改変が求められてきています。しかし、長い蓄積のなかで培われてきた組織の中で、新しい課題への取り組みを進めていくことには大きな困難がともないます。それぞれの実践や経験を活かした、当事者としての知恵が問われてきていると思います。

2 月に開催されましたラウンドテーブルの【Zone B2】では、「これからの教員養成を学部・大学院を通して考える-実践を聴き、夢を語る-」が開催され、学部、大学院で教職課程や教員養成に関わる教員や学生、院生、さらには教員養成に関心のある中学・高校の先生も参加し、互いの取り組みを聴き合い、語り合うセッションが行なわれました。そこでは、武蔵野美術大学の学生を中心に話題提供をしていただき、そこから刺激を受けた教員のみならず、教員養成課程における学びの主体者である学部学生からも「子どもの主体性を伸ばせる教師になりたい」「主体的・対話的で深い学びの実現を先導できるような授業力をつけたい」等の「教職への夢を語る教員養成」を展開していくための多くのヒントが出されました。

今後福井大学での喫緊の課題でもある、学部と教職大学院の接続は、日本の教員養成の共通課題であり、そこで、学部段階における教員養成は、教職大学院への接続も想定しながら、学部・大学院双方の在り方を再考することが求められています。教職大学院では実践をベースとして、学校での長期のインターンシップを通して学校の総体を学び、現職院生とともに日々の実践を語り合い、省察することが学びの中心に据えられています。しかし、教科教育の学びが弱いという問題状況も報告されています。そうであるならば、その前段階である学部における教員養成と、それを受ける教職大学院が担う役割は何なのか？この「問い」は、今日教職大学院が全国的に拡がりを見せるなかで、全国の教育学部・教職大学院に共通する課題であるといえます。

さて、今回の6月23日(土)の【Zone B2】は教員と院生のみでの参加で、どのような教員養成・教師教育・若手教員の力量形成に取り組んでいるのかをじっくりと交流したいと考えています。教職大学院と既設大学院の一本化も目前にしている現在、どのような議論が各大学でなされているのかについても聴き合い、語り合いたいと思います。



- 参加予定 <連合大学院> 福井大学、奈良女子大学、岐阜聖徳学園大学
 <その他の大学> 金沢大学 新潟大学 富山大学 静岡大学 長崎大学 宇都宮大学
 仁愛女子短期大学
 <小・中学校> 野田中学校 雲浜小学校 今富小学校

Orientation	13:00-13:10	ガイダンス	<教育系 1号館 2階 コミュニティプラザ>
Session I	13:10-14:10	ポスターセッション(ナレッジフェア)	<教育系 1号館 1・2階フロア>
Session II	14:10-15:00	話題提供	<教育系 1号館 2階 コミュニティプラザ>
		* 古屋和久 氏 (山梨県身延町立身延小学校・教諭)	
		× 小林和雄 氏 (福井大学連合教職大学院・准教授) からの実践報告	
		テーマ:「対話」と「振り返り」の質を高める教師力とは? (30分)	
		・グループないで簡単な自己紹介や実践報告の感想や意見の共有 (20分)	
Session III	15:10-17:40	グループディスカッションと全体の共有	<教育系 1号館 2階 コミュニティプラザ>
		* 各大学・大学院における教員養成・教師教育のチャレンジ及び小中学校の現場が求め	
		始めている若手教員の教師力の紹介と共有	
		・参加する教員一人ひとりが、自分自身や所属学校での実践を振り返り、これからの教員養成への夢を語る (120分)	
		・学びの全体共有。各グループで話し合われたことをフロア全体で共有 (30分)	

Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする

つながりの編み直しを支える

会場：AOSSA（JR 福井駅東口）

現在、急速な科学技術の高度化やグローバル化、少子高齢化が進む状況のなか、地域が直面する課題も複雑なものへと変化し続けています。言うまでもなく、地域とは共同のかつ長い時間をかけ歴史的・社会的に構築されてきたものです。この大きな変化の時代において、今後地域が萎縮・融解へと向かうのか、あるいは発展・保全へと向かうのか、現在私達はその岐路に立っていると言えます。Zone C では後者を展望し、各地で組み込まれている事例から学び合っています。長い時間の見積みを持った地道な実践の積み重ね、歩み、そしてその展開を地域・世代・領域を超え検討し、更にここ数年はコミュニティの発展における「持続性」に焦点を当て、互いの実践から学び合っています。

今回は、前回のテーマを引継ぎ「つながりの編み直し」を支えるコーディネートの可能性およびコーディネーターの力量形成に焦点を当てていきます。前回よりも、より領域や分野をまたぎながら、職場でどのように職員やスタッフの専門的力量的形成を支える学習のコーディネートが行なわれているのか、地域でどのように持続的なコミュニティをつくっていく長い視点を持った取り組みが行われているのか等を、長期的な実践から学び合っていきます。

地域のコーディネーター、学校関係者、医療・福祉関係者、地域・教育活動に取り組んでいる学生・大学院生、企業の方等をはじめ、あらゆる世代・領域の方々の参加をお待ちしています。

* 6月23日、Zone C の会場は福井駅東口の AOSSA になります。

翌24日の実践研究福井ラウンドテーブルの会場は福井大学文京キャンパスです。ご注意ください。



Orientation 13:00-13:10 ガイダンス <AOSSA>

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア) <AOSSA>

Session II 14:20-15:50 シンポジウム <AOSSA>

〈シンポジスト〉社会福祉法人光道園理事 杉本 博 氏

福井市清水東公民館館長 鈴木 幹夫 氏

〈コメンテーター〉早稲田大学文学学術院教授 村田 晶子 氏

福井大学連合教職大学院講師 隼瀬 悠里 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <AOSSA>

Session II シンポジウムでの話題提供を受け、小グループで実践の交流を行います

※福井の公民館主事、国際交流協会職員、福井大学探求ネットワークの学生、東京や岡山の社会教育関係者、企業の方、医療・福祉関係者等が参加予定です

Zone D 授業研究

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか 子どもたちの探究的な学びを支える教師の協働探究

会場：教育系1号館2階 大2講義室 / 1階 13講義室・2階203, 204講義室

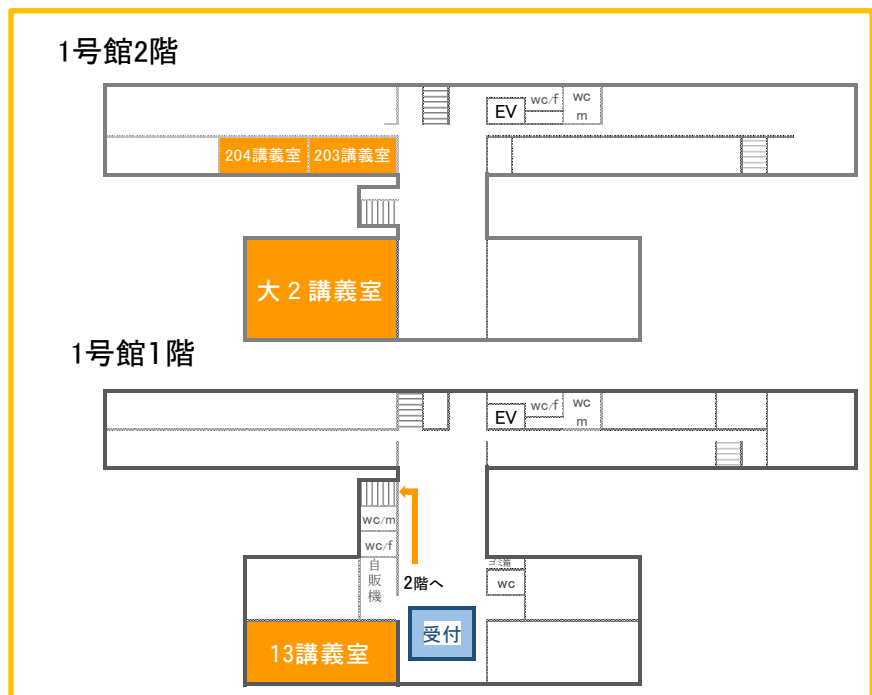
いま、子どもたち自身が主体的に課題に向き合い、さまざまに対話を重ねながら探究し、学びを深めていく学習の在り方が求められています。そのためには、私たち自身の学習観を問い直し、専門職として協働して学び合いながら、授業や保育の質を高めていく授業研究・保育研究が重要となります。こうした背景のもと、ZoneDではこれまで、子どもと教師の学びを支えるための授業研究・保育研究について考えてきました。

「主体的で対話的な深い学び」と一口に言っても、それを実践するのは容易ではない現実もあると思います。道徳や英語など次々に様々な教育内容が新たに加えられていく中で、それらを別々にバラバラにこなすのではなく、場や時間をやりくりしながら紡ぎ合わせ、子どもにとって意味のある活動になるよう、工夫していくカリキュラム・マネジメントが求められてもいます。同時に、実践の場では、多様なニーズをもつ子どもたちを前に、寄り添いながら活動を進めていくことも必要です。

こうした問題を踏まえ、今回は、子ども一人ひとりの思いや考えを大事にしながら、探究的な学びが展開していくには、どのように授業研究・保育研究をしていったらいいのか、掘り下げて考えたいと思います。

「シンポジウム」では、探究的な学びに挑戦してきた実践の取組について、小学校からは管理職としていかにそれらをマネジメントしてきたか、中学校からは若手・中堅としていかに挑戦し協働してきたか、話題提供いただきます。また、アフリカ・マラウイから、福井で探究的な学習と授業研究を学んだメンバーと協働して、自国の現実の中でどのように進めつつあるか、話題提供いただきます。

シンポジウムでの、校種、世代、国境を越えた挑戦と問題提起を踏まえ、「フォーラム」では、参加者がそれぞれの現場で何ができるかを考えていくために、大まかに校種や領域で部屋を分かれます。それぞれの分科会で話題提供者から具体的な実践を簡単に紹介いただいた上で、小グループで話し合い、深めていきたいと思っています。



Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション

＜教育系1号館2階 大2講義室＞

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア)

＜教育系1号館 1・2階フロア＞

Session II 14:20-15:50 シンポジウム

＜1号館2階 大2講義室＞

「子どもたちの探究的な学びを支える教師の協働探究」

〈シンポジスト〉

福井市和田小学校教頭

塚本 康一 氏

福井市美山中学校教諭

佐々木 庸介 氏

マラウイ国教育省教員養成課

ジャスタス・ンカーター 氏

〈コメンテーター〉

福井大学連合教職大学院講師

高阪 将人 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム

＜教育系1号館1階 13講義室 / 2階 203, 204講義室＞

実践紹介の後、小グループで話し合い深め合います。

「多様な授業研究・保育研究から学び合う」

A. 「保幼小の実践に学び合う」

奈良女子大学附属幼稚園教諭

松田 登紀 氏

福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程教諭

五十嵐 洋行 氏

B. 「中高の実践に学び合う」

福井市至民中学校教諭

中内 優子 氏

福井県立大野高等学校教諭

佐藤 拓也 氏

C. 「特別支援教育の実践に学び合う」

福井市麻生津小学校教頭

坪川 修一郎 氏

18:00-18:40

会場：教育系1号館6階 コラボレーションホール

省察的实践学会 発足に向けた第4回準備会

個々のコミュニティ・分野・領域を超え、実践の知を通わせ、結んでいく。そのための新しい実践研究の交流の場を拓く。そうした新しいコミュニケーションの場を目指して、2016年6月に〈省察的实践学会〉の呼びかけをはじめ、以来、多くの方に賛同いただき、さまざまなコミュニティ・分野・領域から発起人・会員が集まりつつあります。これまでのラウンドテーブルにおいて準備会を行い、学会の趣旨を共有してきました。今回、日本学術会議への申請に向けて、学会誌「省察的实践研究」について意見交換をするセッションを持ちたいと思います。関心をお持ちの方はぜひご参加ください。

6/24

(sun) 8:20-14:00

SessionIV 実践の長い道行きを語り展開を支える営みを聞き取る

Round Table Cross Sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

8:20 1号館1階ロビーで受付をお願いいたします。参加するグループを確認してください。（グループは、多様なメンバーが交流できるよう、運営委員会で設定いたします。）

- | | |
|--------|-------------|
| ① はじめに | 8:30-8:40 |
| ② 自己紹介 | 8:40-9:00 |
| ③ 報告Ⅰ | 9:00-10:40 |
| ④ 報告Ⅱ | 10:40-11:40 |
| ⑤ 報告Ⅲ | 12:20-14:00 |

ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができましたらと思います。

グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、この時間帯に、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。

報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。

Students' Poster Session & Students' Forum

これから、21世紀半ばの未来を創っていく小学生・中学生が今、この時の教育の中で何を学び、いかに学び、そして未来を切り拓いていくための力と心をいかに培っているのかを、「私たちの学校・学び・未来」というテーマで子どもたち自身の言葉で表現していただきます。

6月23日(土) 13:10-16:00

会場：教育系1号館2階フロア / 2階 201 講義室

Students'Poster Session 13:10-14:10

＜教育系1号館2階フロア＞

子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来』

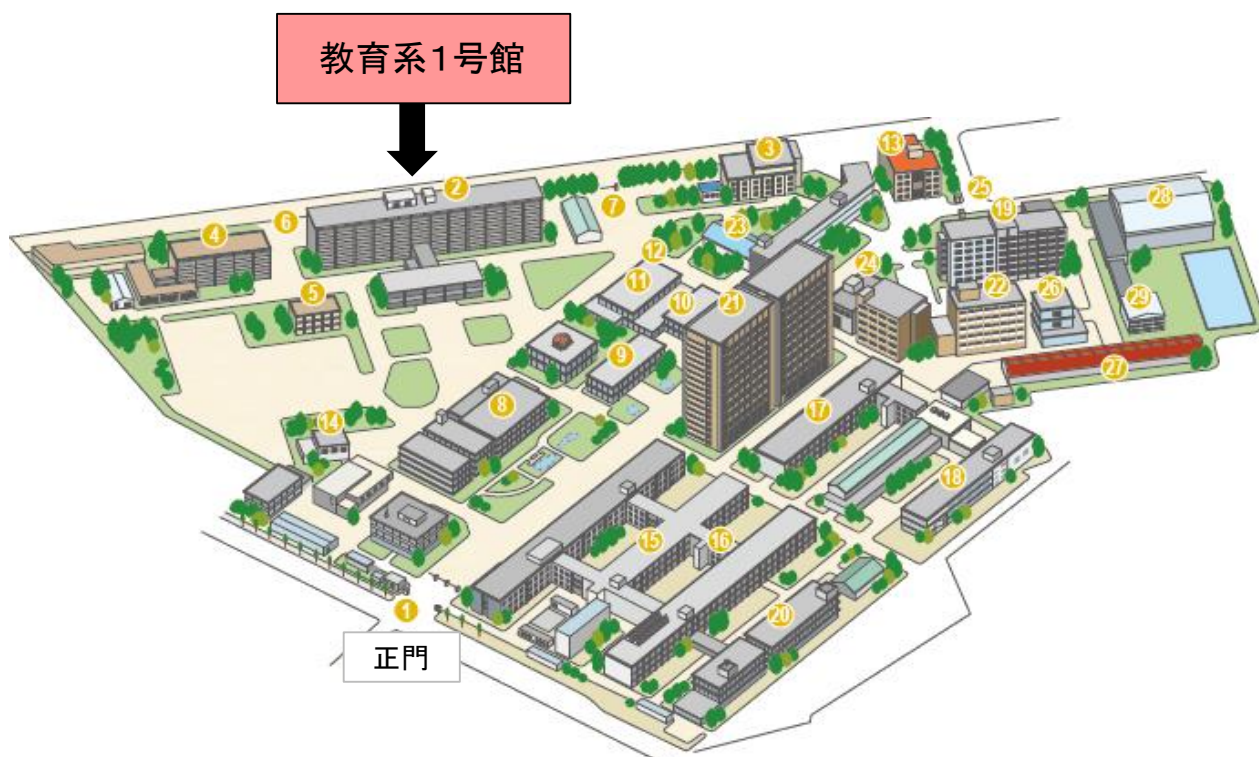
学び de 交流 タイム

14:20-16:00

＜教育系1号館2階 201 講義室＞

「僕たちがつくる学びのカタチ ～なぜ学ぶ? どう学ぶ?～」

※小グループでのディスカッションの後、全体でディスカッションする予定です。



ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうような具体的な手がかかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の

展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないかと。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

(柳沢 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11 ,2009.3.31)

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I II→省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2018.2

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった）
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的实践を支える協働（第 1 回）
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第 1 回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者 20 数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的实践を生み出す 学び合う組織を編む）（第 3 回）
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第 4 回）
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第 5 回）
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第 6 回） 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ：実践研究福井ラウンドテーブル 2004（第 7 回）
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005（第 8 回 参加者 100 名超）
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル 2005（第 9 回）
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・プラザ（第 10 回）
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2006（第 11 回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007（第 12 回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2007（第 13 回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008（第 14 回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル 2008（第 15 回）人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009（第 16 回）稲垣忠彦
- 2009.6.27-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2009（第 17 回）5 つの領域：専門職として学び合うコミュニティ
（分野ごとのセッション始まる）
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010（第 18 回参加者 300 名前後）鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル 2010（第 19 回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護

- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 20 回 参加者 300 名を超える) 門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 21 回) 松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions (第 22 回) (名称を変更する)
- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions (第 23 回) 参加者 450 名を越える
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions (第 24 回) 教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions (第 25 回)
11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013winter sessions (明治大学)
2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム (宇都宮大学) 1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回) 参加者 550 名を超える
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions (第 27 回)
11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム, 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions (第 28 回) 参加者 700 名を超える
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions (第 29 回)
11.21 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
12.19 教育実践福島ラウンドテーブル, 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム,
2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2016.2.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions (第 30 回) 参加者 800 名を超える
生徒ポスターセッションを開催
- 2016.6.24-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions (第 31 回) 参加者総数 547 名
7.8 記念講演&シンポジウム (和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル)
11.12 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
- 2017.2.17-19 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions (第 32 回) 参加者 800 名を超える
特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催。省察実践学会の発足
- 2017.6.23-25 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions (第 33 回) 参加者総数 566 名
10.14 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園), 10.15-21 マラウイラウンドテーブル,
11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学
12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2018.2.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions (第 34 回) 参加者総数 627 名

分散型コミュニティへの挑戦

ラウンドテーブルの広がりと深化



2001年3月、約20名の実践者や研究者が集まり、「教師の実践的力量形成をめざして」というテーマのもとで互いの教育実践と教育実践研究を交流し合う研究会が催された。ここで放たれた熱き議論が「実践研究福井ラウンドテーブル」の産声である。それから14年間もの間、「実践研究福井ラウンドテーブル」は福井県内外と国内外のコミュニティとの往還を絶え間なく積み重ねながら、21世紀の教育を支援するための実践コミュニティを真摯に耕し続けてきた。このたゆまぬ挑戦と努力の成果として、会を重ねるごとに「実践研究福井ラウンドテーブル」への参会者の増加が挙げられるとともに、参会者による実践報告の内容や質の多様化が挙げられる。「実践研究福井ラウンドテーブル」の創世記には少数の実践者の報告のみだったが、現在では研究者も自らの「実践」を報告し、さらに地域コミュニティの人々も自らの取組とその実践的意味を探究するために実践報告を行うようになった。この間、国際的な教育研究の前進を足がかりとしながら、教育の質保証と学びの転換を目指す多種多様な教育改革の施策や取組がなされてきた。その全ては、21世紀の知識社会に生きる子どもたちの幸せを保証するための挑戦であり、子どもたちの成長を支える全ての教育関係者の実践を支えるための挑戦である。「実践研究福井ラウンドテーブル」はこれらの挑戦を促し支えるための省察的機構としての実践コミュニティである。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの文字通り「実践の省察」を促し支えることをビジョンとする。このビジョンを基盤とした「実践研究福井ラウンドテーブル」には、日本全国や世界各地から多数の実践者や研究者が集まる。当然、彼ら／彼女らは「実践研究福井ラウンドテーブル」とは異なるコミュニティ、あるいは複数のコミュニティに属しており、それぞれのコミュニティ内でイノベーションを生み出す実践に挑戦している。つまり、「実践研究福井ラウンドテーブル」はローカル・コミュニティが集合する大きな、コミュニティの「坩堝(るつぼ)」なのである。もしも、このコミュニティの中で数多あるローカル・コミュニティが有機的に結びつき、そこでコミュニティ間の相互

作用が加速化すると何か起きるのだろうか。それはおそらく新たな「知」の創発であり、新たな「かかわり」の生成であろう。これら新たな「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、現代社会を取り巻く困難や格差を突破するためのいくつかの「解(ソリューション)」が生み出される可能性が高まる。ただし、このダイナミクスを大きくし、このダイナミクスの質を深化させるためには「戦略」が必要になる。ただ指をくわえて待っているだけではダイナミクスやイノベーションは起こらないのである。

福井大学教職大学院はこれまでの「実践研究福井ラウンドテーブル」結びつきを強めたいいくつかのコミュニティと連携し、「分散型コミュニティ」の設計に着手し始めた。日本全国そして世界各地にあるコミュニティの相互作用と化学反応を生み出すためには、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことが可能な「分散型コミュニティ」を設計することが肝要である。複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そこで互いの課題や問題を同定し、それらの解決策を考察し、共有可能な「知」を蓄積することが可能になる。「分散型コミュニティ」への挑戦とはつまり、「グローバル・コミュニティ」を築くための挑戦なのである。

2014年度には福井大学教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島で共有された理念とビジョンに基づく「ラウンドテーブル」が開かれた。この「ラウンドテーブル」の広がりと共に各地で放たれた息吹は、日本の教育実践を支える新たな「省察的機構としての実践コミュニティ」の産声である。そしてこの実践コミュニティの足音はすでに様々な地域で共振している。この実践コミュニティは、おそらく日本の教育界ではじめて戦略的に組織化された「分散型コミュニティ」であり、今後数年あるいは十数年で「グローバル・コミュニティ」と深化・進化することだろう。

(木村 優『2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書 ラウンドテーブルの広がりと深化』2015.3.31)

Archive

—アーカイブ—

ラウンドテーブル 2014 Summer Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No.65 (14.07.21) からご紹介いたします。

Newsletter No.65 (14.07.21) より

実践研究福井ラウンドテーブルに参加して

大阪ECO動物海洋専門学校 山下 真澄

学びの振り返り

今回、福井ラウンドテーブル2014 summer sessions (6月22日)に参加し、実践報告する貴重な機会を得た。ラウンドテーブルでは、小グループでそれぞれの教育実践をじっくりと語り、聴き合い、学び合うことに取り組む場である。報告者として60分で何を語るべきか 試行錯誤した。その準備過程で、改めて大阪教育大学夜間大学院での学びを振り返ることができた。

大学院在学中は、各科目の繋がりや関係性をじっくり考えたことがなかった。当時はそのような余裕もなく、とにかく授業に出席し、課題をこなし、最終レポートを書いて修了に必要な単位を取得することだけを考えていた。今回、自分自身の実践を語るにあたり、各授業で課せられたレポートを読み返す中で、大学院で受講した各科目の意義を再確認することができた。そして、スクールリーダーコースでの学びを包括的に理解し、今更ながら自身の成長を改めて実感できた。今回のような機会がなければ、大学院での学びを振り返ることがなかったかもしれないと思うと、お声掛けいただいた大脇教授には感謝の気持ちでいっぱいである。

報告「動物ガイドができる飼育員の育成」

私の報告は、「専門学校における教育活動ができる動物飼育員の育成」である。修士論文で取り組んだ内容をふまえて、専門学校の実践を語ることにした。勤務校は動物系の専門学校で、業界が求める人材を業界と共に育成すること目指し、実学教育と人間教育に重点を置いた授業を展開している。いわゆる「産学協同教育」がテーマである。

私が参加したグループのメンバーは、大学院スタッフ(福井大学教職大学院)、中学校教諭(福井大学附属中学校)、小学校教諭(長崎県佐世保市)、大学院

生(福井大学)と私の5名であった。そのため、専門学校で紹介や特性について学校パンフレットなどを使用して、少し時間をかけて説明した。その一つは、学校職員と授業を担当するプロ講師の関係性である。

本校では、学校職員はカリキュラム開発やクラス運営など専攻のマネジメントを主な業務としている。授業は、業界で活躍している専門家(プロ講師)から直接教わる仕組みとなっている。プロ講師は、専門的な知識・技術に関しては一流であるが、教育のプロではない。そのようなプロ講師に、学校の考えを理解してもらい、協働して教育活動を行なってもらおうことが学校職員の課題となっている。

この課題解決の取り組みを、大学院の「スクールリーダー実践論」(木岡一明教授・名城大学大学院)で立案し実践したので、紹介した。その方法は、木岡教授流の特質分析(組織心理と組織マネジメント)によって学校の特性と問題点を整理し、SWOT分析によって戦略を立て、その解決に向けた実践計画を立てるものである。一連の分析の結果、大切なキーワードはコミュニケーションであった。本校の強みは、業界との幅広いコネクションと、業界から依頼される企業プロジェクトを取り入れた「産学協同教育」である。プロ講師には、そのことに気づいてもらうために、意見交換できる機会を提供することが重要である。そこでは、授業で立案した改革案を決定事項として伝えるのではなく、特質分析やSWOT分析をプロ講師と一緒に実施し、主体的に改革案を作り出していくのである。そこでは、学校職員はファシリテーターとなり、講師間の意見交換がスムーズにいくよう支援する。そして、みんなで作成した改革案は、学校の基本方針をふまえて講師自ら主体的に活動していく「雨傘マネジメント方式」を基軸に、講師をサポートしていくのである。

勤務校の特性や課題解決の取り組みに触れた後、「動物ガイドができる飼育員の育成」を目的とした「動物ガイド実習」について話した。この実習は、動物施設で一般来場者を対象に、担当動物について約15分間のガイドを行う産学協同型の実践実習である。学生は5～6名のチームで、約4か月かけて準備を行う。これまでは、学生が実施するガイド内容について評価基準がなかったため、指導が困難であった。そこで、ガイドの技能項目をリスト化し、数値評価できる評価シートを動物飼育員とガイド指導者と共同して開発した。

今回の研究では、この評価シートの信頼性とその効果について検証した。まず、評価シートが評価者によって偏りのない結果となるか、その信頼性について実験をした。2種類の評価方法で分析を行なった結果、どちらの評価においても評価者間で有意な差が認められず、その信頼性を確認できた。そして、評価シートを使用したグループと使用しないグループに分けて実践指導を行なった結果、評価シートを事前配布したグループの方が点数の上昇幅が大きかった。このことから、この評価シートが指導者にとって有効な指導ツールとなることが確認できた。また、この評価シートの活用により客観的な自己評価が可能となり、学生にとってもガイド技能を向上させる自己学習ツールとなることが分かった。

報告者としての力量

自分自身の実践報告を通じて、語りの難しさを痛感した。60分の持ち時間であったが、実際は45分程度しか語ることができなかった。ファシリテーターの先生が、報告内容に関連した話題を提供してくださり、聴き手の先生方による報告内容を掘り下げる質問のお陰で時間まで討議することができた。明らかに、練習不足と経験不足による失敗であった。事前に何度か発表練習をしたが、本番では緊張して、準備していた話題に対し説明不足となり十分な情報提供ができなかった。

それに比べ、福井大学の院生は語りが上手いと感じた。発表された実践内容も素晴らしかったが、語りの技量にも感心させられた。聴き手に分かりやすく伝わるよう、資料の使い方や発表態度（アイコンタクトや声の質・大きさ）を工夫されていた。大阪教育大学では、長時間じっくりと自分自身の実践活動を語り省察するような機会はなかった。事例研究やインターンシップの発表は長くても30分程度で、修士論文は各自30分の内発表は10分間であった。グループ学習においても、ブレインストーミングやケースメソッドなどお互いに意見交換する討議であった。大阪教育大学が課題を探究し修士論文としてまとめ上げることに重点をおいているのに対して、福井大学の「語りと傾聴」による学びは新鮮であった。今回の経験を通じて、ラウンドテーブルの「語り」という学習スタイルに対応することが、私の新たな課題となった。

浮かび上がった思いや考えを咀嚼し共有する2日間

スクールリーダー養成コース2年／福井県特別支援教育センター 船谷 友代

福井ラウンドテーブルでは、ポスターセッション、テーマごとのシンポジウムやフォーラム、そしてクロスセッションが行われる。ポスターセッションでは4本のポスター発表を、シンポジウムとフォーラムではそれぞれ2本の報告を聞くことができる。もうこの情報だけで、頭の中は、一旦、飽和状態になるのだが、ここで終わらないのがラウンドテーブルのすごいところで、醍醐味ともいえると思う。それぞれの報告の後には、報告者と参加者の間で必ずセッションがなされる。また、出席者全員が小グループでセッションを行う。報告者一人一人の発表の内容に、自分や他者の考えを重ねる作業を行うことで、報告の

エッセンスがより鮮明に浮かび上がり、自分の考えもまた整理されていく。得た情報に、自分なりの思いや疑問をことばにして投げかけ、それに対してまた新たな意見を得る。そのような、整理や意味づけのやりとりがなければ、せっかくの報告の内容は意外とあっさりと頭の中の引き出しにしまいこまれてしまう気がする。

1日目に参加した『Zone A学校』のプログラムでは、教師のやりがいがある学校づくりについて、小学校、中学校、高等学校の実践報告を聞き、語り合った。

session II では、子どもの学びと教師の学びの関係について特に考えさせられた。学校が抱える課題を解決するための学校改革や授業改善が、「子どものためになるかどうか」という明確なビジョンのもと展開された小学の報告。ここでは、子ども理解や授業の改善等、具体的な対応策が示された。管理職のリーダーシップのもと、理論に裏打ちされた指導方法等が示されたのであるが、この中で一番印象的だったのは、「子どもについて、よくなった・よかった具体的なエピソードを周囲の人に伝える。そのことから組織は変わっていく」ということばだった。子どもの姿に教師の姿が映し出され、その達成感が次の実践の動機づけになっているのだろうと想像できた。

session III では、session II で生まれた問いや、新たな報告を受けて生まれた問いを、小グループで聞き合い、語り合った。「やりがい」ということばが、何人かの人の思考をとおして「教師自身の有用感」や「教師同士の認め合い」などということばに少しずつ置き換わっていく。それをとおして、自分の思考にも広がりが出てくるように感じた。

2 日目は、異校種、異業種のグループでのクロスセッションが行われた。公民館主事、大学の学部生、現職の大学院生、小学校教諭と、多様なメンバーが、キャ

リアや立場をこえて意見を交換し、共有した。接点は一体どこにあるのだろうと、全員が不安でいっぱいスタートであったが、他者の実践の中には必ず自分の実践と共通の側面があった。また、自分がもっていない、思いもつかないような視点での意見をいくつも受け取ることができた。一つ一つの細かな実践の上でのつながりだけでなく、家庭―学校―地域で子どものより豊かな育ちを支えるために…という大きなテーマを共有したチームというような一体感も味わった。

2 日間をとおして、多様な報告や意見を聞いたり、自分の実践や考えを語ったりしたことで、新たなことばや表現を得たし、多様な視点をもつことができた。これらは、ただ目や耳から入っただけの情報とは違い、頭の中で咀嚼し、自分のことばに置き直して周囲に話して共有している。他者の実践に乗り移ったり、自分の実践に引きつけたりする思考をとおして、様々な実践がリアリティーをもって自分の中に存在している。これが学ぶということなのだと思う。今後いかに活かせるかというのが課題か、と思ったが、これはきっと、ひょっこりと思いがけない場面で活きるのではないかな。

「問い」の奥深さ

教職専門性開発コース 2 年／福井大学教育地域科学部附属中学校 棟田 章裕

6 月 21 日 22 日、私にとって 3 回目となる福井ラウンドテーブルに参加しました。突然ではありますが、私は参加後に毎回感じるがあります。それは院生という立場ですが、「明日からまた頑張ろう」という気持ちです。なぜこのような気持ちになるのだろうかと考えてみますと、私は職種、校種、役職、年齢が異なる方々と、一つのテーブルを囲いながら、報告を聴き合い、悩み、考え、語り合うことから生まれているのではないかと思います。そして限られた時間の中で、こうした機会がなければ会えない方々と共に空間をつくりあげることで、これまでに見えなかった視点や考えを知り、次に挑戦しようとする力が生まれるのではと思います。

ラウンドテーブル 1 日目は Zone D「授業」に参加しました。今回の Zone D では、2014 年 3 月に「問いはどこから生まれるのか？」について対話することで深まり生まれた「子どもたちに質の高い学びを生む問いとは？」「質の高い学びとは？」という新

たな問いに関して、報告者の方々の発表を手がかりに小グループ、全体で考えを深めていきました。私は先生方のお話を聞く中で疑問や問いが生まれ、さらに語り合うことで新たに自分の中に問いが生まれていきました。「問いを発するのは子ども？それとも教師？」「授業名人の問いは子どもに寄り添ったものになっているが、質の高い授業って？」「そもそも問いの質や学びの質とは？」「学びの質は学ぶ楽しさを気付くことができるようなもの？子どもたち自身が価値を見いだすことができるもの？教師は何ができるのか？」など子どもや教師、教科など様々な視点から質の高い学びを生む問いについて迫っていったように思います。そして様々なお話の中で、特別支援学校の先生が「その子の将来のためになることをいつも考えている」という言葉がありました。私はこの言葉を聞いて、私はどうだろうと改めて考えることができました。そして、一人一人の子どもを理解するこ

とから、より良い問いが生まれるきっかけになるのではと感じました。

最後に、今回 Zone Dで学ばせていただいた質の高い学びを生む問いやその授業についてまだモヤモヤとしている私ですが、今回いただいた授業や問い

を考える視点についてこれから問い続けながら学んでいきたいと思います。院生として最後になる4回目の福井ラウンドテーブルでは、前回と今回の続きとなる Zone Dに参加して、さらに考えを深めさせていたきたいと思います。

Zone A

長崎県東彼杵郡波佐見町立波佐見中学校 教諭 猪 晃一郎

私は、教師になって17年目を迎えます。17年間の間に、子どもたちをはじめ、保護者、教職員、いろいろな方と出会ってきました。県外に行くことで、さらにいろいろな人々と出会い、つながることができます。今まで、長崎県の教育が、あたりまえと考えていた自分が、他地域の方の話を聞いたり、学校の様子や実態を把握したりすることで、様々なものの見方や考え方があることを知ることができました。

さらに、学校教育関係者だけではなく、他の職業で働いていらっしゃる方の話を聞くことができることも私にとって、大きな刺激を受けます。

ラウンドテーブルでは、たくさんのことを学ぶことができるので、長崎県から往復で約16時間の移動時間がかかりますが、今回、参加させていただきました。

前回、参加させていただいたときは、福井県の教育水準の高さに感動しました。教師が大学院で研修を深め、大学院卒業後は、ミドルリーダーとして、学校現場で活躍できる組織体制がしっかりと構築されていました。学校内に、大学院で研修を深めた教師が複数人いることにも、驚きました。

2回目の参加となった今回は、介護士の方の話を聞くことができました。介護を要する一人の男性と

の体験談でした。初めて接したときは、そばにいくと逃げていくような感じで、全く介護士を相手にしてくれなかったが、あきらめずに毎日接することで、次第に男性が心を開き、自分を頼りにしてくれるようになったという実践の紹介でした。信頼関係を構築するための介護士のあきらめない姿勢に、とても感銘を受けました。すべての生徒を受け入れ、救わなければならない学校現場で働く一教師として、相通じることがあり、学ぶことが多い実践発表でした。介護士の方は、私の17年間の教師生活の歩みを聞き、「中学生の時、先生がこういう気持ちで、こんなに大変だったなんて、全くわかりませんでした。」という感想を持たれていました。

このようにラウンドテーブルでは、たくさんの出会いがあり、様々なことを学ぶことができます。半期に一度の開催で、全国の人々の実践を聞き、自分も、もっとがんばらないといけないと自分自身を励ますと同時に、次の機会では、どのような実践を紹介しようかと思うことが、私の日々の仕事のやりがいにつながり、ラウンドテーブルを楽しみにさせていただいている次第です。

このような学ぶ機会をいただき、大変うれしく思っています。関係者の皆様、ありがとうございます。

Zone B

宇都宮大学教授 教職センター副センター長兼教職企画調整室長 瓦井 千尋

6月21日(土)、22日(日)の二日間、福井大学教職大学院が主催するラウンドテーブルに今回初めて参加させていただきました。4つのゾーンと5つのセッションを貫く共通のテーマは、『実践し省察するコミュニティ』。

さて、今回私は、4つのゾーンの中から迷うことなく、「ゾーンB 教師教育：教職大学院をイノベーションする」を選びました。その理由は三つありました。

一つは、昨今、教員養成改革を推し進める上で、特に大きな期待が寄せられている教職大学院について、福井大学教職大学院が現在どういった取り組みを行

っているのかを自分の目と耳と肌とで体得したかったからです。

二つ目は、サブタイトルの「教職大学院を担う教員の資質能力向上に向けて」で議論される内容が、近々、我が宇都宮大学にとっても、喫緊の課題になってくるに違いないと想定したからです。

そして三つ目は、福井大学教職大学院への現職派遣教員の確保をはじめとする大学と県教委、地教委等との水面下における具体的な折衝をどのように行っているのか等について御教示いただこうと思ったからです。

一つ目の教職大学院の取組状況については、松木健一先生から、別途、単独でポスターセッションを行っていただき、つぶさに御説明を受けましたので、福井大学ならではの取組の状況がよく理解できました。

このことを踏まえて、私の二つ目の課題にかかわるゾーンB教師のセッションⅡのシンポジウムに臨みました。そこでは、4人のシンポジストから問題提起や調査報告、行政説明等が行われました。特に、これまで長く教職大学院設置に奔走されてこられた村山先生（北教大）の熱い思いがヒシヒシと伝わって参

りました。文科省からの認可が下りれば、来春、我が宇都宮大学にも教職大学院が設置されることになるので、大変参考になるシンポジウムでした。

引き続き行われたセッションⅢのフォーラムは、中身の濃い議論となりました。私と同じく県教委の次長職を退任後、福井大学教職大学院のスタッフとなられた松田先生の巧みな進行の下、文科省の森室長補佐、我が宇都宮大学と同じく来春、教職大学院の開設が予定されている大教大の冨田先生、そして新進気鋭の山口東京理科大の畑中先生との有意義な意見交換ができました。

二日目のクロスセッションは、朝8時30分から午後2時までの数時間、6名の小グループの中で、3名の実践報告等を基に昼食・休憩をはさんで熱気のある話し合いの場がもたれました。教職を目指す学生・院生さんの素朴にして根源的な質疑や悩み等が印象に残りました。

二日間、大変有意義な時間を過ごすことができました。福井大学の関係各位に衷心より感謝申し上げます。

Zone C

福井大学教育地域科学部社会系教育コース3年 寺島 亮太

今回、私は実践研究福井ラウンドテーブルに参加した。今回で3回目の参加であり、報告も2回目だった。今まで参加してきて、私が発表するしないにかかわらず、何かしらの学びを得てきた。もちろん、今回も同じであり、とても有意義な時間を過ごすことができた。以下、簡単に2日間で得た学びについて述べていきたい。

1日目は、Zone Cに参加した。「持続可能なコミュニティをコーディネートする」というテーマの下、ポスターセッションやシンポジウム、クロスセッションに参加した。ポスターセッションでは、私が実践している探求ネットワーク（以下、探求）や、公民館の報告を聞いた。地域に根差した公民館活動の報告は興味深いものであった。またシンポジウムでは「コミュニティをひらき支える広報と記録」ということで、いかにして地域の理解を得て、それを記録し、広報していくのか、そのあり方について考えさせられた。そして、クロスセッションで私は、実践していることについて報告した。2日目は、1日目のZone

に関係なく少人数に分かれての、実践報告だった。この場でも、私は報告した。大学教授や中学校の先生もいらっしやり、有意義な時間を過ごすことができた。

さてここからは、報告の中で具体的にどのようなコメントを得られ考えたことについて述べていきたい。まず、探求の知名度の低さである。今年度探求は20年目を迎え、規模も大きい組織となった。しかし、それでもこの実践を知っている人は少なく、県内の先生や公民館の方たちでさえ「福大ではこのような実践がされていたのか」と、あまり知られていない。これは、とても残念なことである。しかしこの現状は、これから探求がよりよい組織になっていく可能性があることを示している。ここで広報の在り方をとらえ直し、よりよく探求の情報を発信していけば、今までにあまりなかった公民館や地域の方々と連携した活動というものを創りあげることができるようではないか。このラウンドテーブルも、その広報の場の1つとして捉えることができる。この場で探求を発信することで新たなつながりが生まれ、双方にとって

いい影響が生まれるに違いない。実際に今回参加してある公民館の方とつながりができ、私が所属するかみすきブロックが地域で講座を開くことが決定している。このようにつながりが生まれれば、より探求が広く認知され、地域に支えられる組織へと発展していけるのではないか。その可能性について、改めて考えさせられた。

では、どのようにして探求を発信していくのか。発信する場としては、このようなラウンドテーブルなどの場で行えばよい。しかし、単にポスターにまとめて発表するだけでは不十分だと考える。そこで重要となってくるのは、実際に活動している私たちスタッフの実践記録だ。探求での実践を通して、子どもたちはどのような力を身に付け、スタッフはそれにどのように介入し、学んだのか、そして意味づけをしたのか。それを記録化し、発信していくことが今後より一層求められると思う。今回私が報告していくなかで、「どうやって、子どもの学びを記録している?」「あなたが今までの実践を、どう意味づけしてきた?」と聞かれることがあった。このコメントに対して、私は自分の考えを上手く伝えることができなかった。これは、私がしっかりと今までの実践を意味づけし、記録化できていなかった証拠である。探求での実践は、これからの自分にとってためになるものである。それなのに、今の段階ではそれを自分のものにはできていない。今回をきっかけに、いかに自分の学び、子どもの学びを意味づけしていくのか考え、それを記録化していきたいと感じた。

さて、以上が今回ラウンドテーブルに参加して得た学びである。いつも感じることだが、こうした学び

というのは、探求内だけでは気づかないことが多い。視点を変えて捉えてみると、新たなことに気づくことができる。だからこそ、今回のような場での情報発信による、外部の視点を大事にしていきたい。

最後に、春サイクルについて述べていく。ラウンドテーブルから2週間、春サイクルの集大成であるミニなかつりが開かれた。ここでは、子どもたちが日ごろの活動の成果を他のブロックや保護者、地域の方に発表する。子どもたちにとって普段経験しないことでありいい機会であるが、なかなかうまくはいかない。そこでスタッフとしては、雰囲気づくりを大事にしていきたい。子どもたち、特に自分のブロックの子どもたちにとって、発表することに対して苦手意識を持っている。そのような子たちが発表できるようになるためには、安心できるような雰囲気を作ってあげることが大切になってくる。発表を聞いてくれる環境、失敗しても大丈夫だと思えるような温かい雰囲気、発表がしたくなるような雰囲気。そのような中で、子どもたちは普段と違う活動にも、勇気を出して取り組んでくれるのではないかと、3年間活動してきて見えてきた。今年度の春サイクルの子どもたちは、昨年度までとは少し違う、成長した姿が見られた。そのような姿を見られたことをうれしく思うと同時に、それらをもっと磨いてよりよいものにしていきたいという願いを今持っている。春サイクルでの学びをこれからの振り返りで意味づけ、さらには記録化し、夏サイクル以降の活動へとつなげていきたい。

Zone D

福井大学教育地域科学部 美術教育サブコース2年 中村 栞

session II・IIIの私のグループは現役の教師の方が3名、私を含め学部生が2名で、ほぼ教師の方3人で話しが進められていて、私たち学部生は話を振られたら答えるということを繰り返していた。特にsession IIでは、まだ授業者の立場に立ったことのない私たちには入ることができない内容であり、私は3人の話をただ聞いているだけでいいのだろうと複雑な気持ちでいた。

そんな気持ちで迎えた session III。滝田先生の話で複雑な気持ちも吹っ飛んで行った。滝田先生は私たち美術科4人が本当は伝えたかった「美術って必要

だと思いますか?」という質問を堂々と投げかけたのである。

まだ滝田先生がどのような話をするかわからなかった導入のときに、先生は「続きましてっていうのが学生るとき嫌いだったので1分後に私話し始めますのでみなさん好きにしてください」という発言に衝撃を受けた。この人は学生の頃の気持ちを忘れていない、と思った。特に、最近の私は、授業者の立場でしか考えてないような気がする…という考えを持っていたのでとても驚いた。そして、「なんで美術するの?」と、でかでかとスクリーンに映し出され、この人すごいなと感覚的に感じた。滝田先生の実践

や話を聞いていくと教育学部を出ていないからこそできる活動だったり、子どもとの関わり方が見えてきたりした。私はこの学部へきて、自由な発想が、色々な文献や資料などの検討によって縛られていく感覚に去年から陥った。だから滝田先生の自由な発想や楽しそうに授業する様子、子どもたちとの関わり方が本当にうらやましく思えた。私もいつまでも縛られていないで初心に帰らないといけないと心から感じた。また、自画像の話をしている中で思ったことは、先生の美術に対する、教育に対する固定概念を一回外すことで子どもの目線が見えたり、子どもの表現の幅が広がったりするのかもしれないということだ。

滝田先生の「なんで美術が必要なの？」という問いはあの教室にいた全ての人の心を動かしたように感じた。始まりのとき関心なさそうに前を向いたり、下を向いていたり何かしていた人たちが全員顔を上げ

て滝田先生の方を見ていた。その光景をみて、「もしかしたらこの考えを広げていったら今の日本の教育が変わるかもしれない」と感じた。最後に生徒達から滝田先生への文章を読んでいた時、「美術って必要なんだ、よかった」と私もうれしくて泣きそうになってしまった。

そのあとグループへ戻ったとき、初めにあったへだたりがなくなり全員同じ土俵で話ができる雰囲気になっていた。そこでグループの教師の方に「美術は必要だと思う」と言われて、これから頑張っていこうと思った。

「なんで〇〇は必要なの？」という質問を改めて考えることが、質のいい、子どものための授業づくりに繋がるのかもしれないと感じた。私も常に、美術はどうして必要なの、という問いを持ち続けると同時に初心を忘れないことを大切にしようと思えた、とても学ぶことの多い時間だった。

※ご所属は当時のものです。

福井大学基金にもとづく
福井大学教職大学院
次世代教育創成資金

明日の学校をつくる協働の実践と探究を支えるために
明日の教師の学びを支えるために

次世代教育創成資金に
ぜひご協力ください。



詳細はパンフレットにてご確認ください。

教職大学院 Newsletter **No.112**

2018.6.22 発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院

福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp